ビオラ合宿 若手育成

尽きぬ情熱 俊才導く

世界的なビオラ奏者、今井信子さんが今月上旬、今年で7回目となる「ゆらぎの里ヴィオラマスタークラス」（実行委主催）を小樽市内の朝里川温泉で開いた。今井さんがまとまった期間、世界中から選抜した若手演奏家を鍛える唯一の機会。参加者は8日間の合宿で技量と音楽性を磨く一方、成果を披露するコンサートで市民にビオラの魅力を伝えた。合宿にかける今井さんや受講生らの思いをまとめた。（武藤理司）

世界的奏者 今井信子さん

「あなたはここをどういうふうに弾きたいの」。今井さんは受講生にこう尋ねる。伴奏を担当するピアニスト田中利恵さん（オランダ在住）は「受講生が、こういう感情で、こういうふうに弾きたいというのがレッスンのたびに見えてくる。8日間ですごく成長したのを感じる」と話す。

田中さんはアムステルダムで今井さんと知り合い、「小樽にはいい温泉があるよ」と誘われ参加した。今年で3回目。

「自分がこう弾きたいと思っている受講生ほど合わせやすい。ぐじゅぐじゅ言ってる人には返事ができない。アイデアを持ってきている人とだんだん掛け合いができてくると楽しくなってくる」

今年のビオラの受講生は音大生や交響楽団員、フリー奏者ら10人。昨年9月、東京で行われたオーディションで選ばれた9人に札響首席奏者の小峰航一さんが加わった。

外国人は韓国、中国、ハンガリーから計4人。東京の高校生1人以外は全員が20代だ。

宿舎は貸し切りにした朝里川温泉のペンション。3～9日の朝から深夜まで練習に打ち込み、10日はコンサートに臨んだ。受講生は毎日、今井さんから直接レッスンを受け、自分の部屋に課題を持ち込む。コンサートで発表するアンサンブルの練習もある。

最終日の10日夜、宿舎で打ち上げが行われた。厳しい合宿を終えた受講生には開放感がにじむ。互いの演奏スタイルの物まねをするなど、深夜まで笑いが絶えなかった。

マスタークラスは小樽・朝里のまちづくりの会が主催してきたが、今回から実行委主催に衣替えした。受け入れの中心は、小樽市内の主婦高野るみさん。小樽で今井さんの演奏会を開いたことなどが縁で、2004年に第1回を開催した。これまでの受講生は延べ80人。高野さんは、「若い音楽家がここをきっかけに海外に留学したり、オーケストラに入ったりするのを見るのが楽しい」と話している。

合宿で受講生（右）を指導する今井さん

小樽で7回目 本音で掛け合い成長

練習の成果 地元に還元

市内で二つのコンサート

「第7回ゆらぎの里ヴィオラマスタークラス」の成果は10日、小樽市民センター・マリンホールで開かれた二つのコンサートで発表された。箏（そう）やクラリネットも交えて、ビオラやビオラアンサンブルの醍醐味（だいごみ）を聴かせた。

夜に行われたのは「ニューイヤーコンサート」。まず日本の4人がテレマン「四つのビオラのための協奏曲第4番」を演奏。柔らかくふくらみのある音色で会場を包んだ。

クラリネットが加わったのはブルッフの「クラリネット、ビオラとピアノのための八つの小品」。ビオラの受講生4人が2曲ずつ交代で弾き、うなるような低音からつややかな高音までみずみずしい音色を響かせた。クラリネットを担当した西田佳代さん（ドイツ留学中）は「ビオラとクラリネットは音も溶け合いやすい」と話した。

箏は小樽の箏奏者、難波雅楽紫奈（なんばうたしな）さんが担当し、ビオラとともに「風彩」（米川敏子作曲）を演奏した。難波さんは「音色や響きは違いますが、同じ弦楽器なのでしっくりきました」と振り返る。

「ロメオとジュリエット」を演奏する今井さん（左端）

トリで登場した今井さんはプロコフィエフのバレエ音楽「ロメオとジュリエット」から「朝の歌」などビオラ二重奏の曲を合め7曲を披露。熟練の技巧と多彩な音色を使い分け、悲恋物語を劇的に表現した。

これに先立ち、「ヴィオラブーケ・コンサート～若き音楽家たちが奏でる色とりどりの小品集」が同じ会場で行われ、受講生が1人ずつバッハのシャコンヌやシューマンの「おとぎ話」などを演奏した。

今井さんに聞く

ひらめき共有したい

今井信子さんに若手の指導にかける意気込みを聞いた。

――後進の育成に熱心ですね。

「若い人たちとワイワイやるのが好きなんです。自分から『合宿に来ない？』って電話します。才能を持っている人や感受性のある人を見つけるのは、とてもうれしい。若手を育てるのは自然なことです。自分の中にインスピレーションがあるなら、分かち合いたいと思います。何でこういうふうに弾けないのかな、そういうのやってみればって」

――まとまった時間教えるマスタークラスは小樽だけなんですね。

「適当な場所を探しましたが、小樽には高野るみさんという、核になってくれる人がいます。彼女はビオラが本当に好きで、ありとあらゆる仕事を引き受けてくれます。小樽に来ると、また戻ってきたという感じがします。お手伝いしてくれるマチの方たちに会うのも楽しみです」

――雪の小樽で音楽に集中できましたか。

「今年は雪が多くマチの人には大変だと思いますが、私は喜んでいます。こういう環境で音楽をやるのは新鮮だし、敬虔な気持ちになります。こういう合宿はなかなかないんですよ。格式張っていないし、少人数だから自由に運営できます」

――連日、深夜までの指導で疲れませんか。

「そんなことはありません。ここでは音楽のことだけやればいい。雑用がないんです。食事は出てくるし、電話はかかってきません」

――例年と違う点はありますか。

「クラリネットが加わりました。ビオラとても相性がいいんです。ブルッフ『クラリネット、ビオラとピアノのための八つの小品』をやりましたが、学生のうちはあまり演奏する機会がない曲です」

――今井さんはプロコフィエフの「ロメオとジュリエット」を演奏しました。

「プラームスやベートーベンじゃない曲を弾きたいと思っていました。ビオラ用に編曲したものですけど、分かりやすくて、とってもよくできています。マンドリンのような響きやいろんな音が出てくるんですよ」

――今年のクラスを総括してください。

「受講生の半分近くが外国人で、ものすごく高いレベルでした。コンサートで演奏したテレマンの曲はとても難しいので、みんな最後の最後まで練習していました。いい経験になったと思います。合宿の成果はみんなの心の中に残るでしょう」

いまい・のぶこ　東京生まれ。桐朋学園大卒。1967年ミュンヘン国際コンクール、68年ジュネーブ国際コンクールで最高位入賞。90年にベルリン・フィル、小沢征爾さん指揮サイトウ・キネン・オーケストラのソリストとして協演するなど、世界を舞台に活躍。現在はスイスに住み、ジュネーブ音楽院、アムステルダム音楽院、上野学園大などの教授を務める。

打ち上げで今井さん（右から2人目）と合奏する受講生ら ▶

多くの刺激「未来見えた」受講生

小樽の合宿を通じて、受講生たちはさまざまなことを学び、発見した。

今井さんがニューイヤーコンサートで演奏した「ロメオとジュリエット」について、札響首席ビオラ奏者の小峰航一さんは「聴いていて鳥肌が立ってきた」と話す。「『世界の信子』は年末にジュネーブから小樽に入って受講生を教え、コンサートで新しいレパートリー『ロメオとジュリエット』を披露した。あんなにきつい日程なのに楽しみながらこなしているのは素晴らしい」と称賛。「札響にも来て演奏し、ビオラ奏者としての生き方も示してほしい」と期待する。

札幌の裴渡美穂子さん（フリー）は「今井先生から一番教えてもらったのは、音楽とどう向き合っていくかということ。先生は本当に深いところで考えている。どう音楽をつくっていくべきか、少しだけ見えてきた」と言う。

東京の佐藤優季さん（フリー）は「音楽をするためには、すごく強い意志を持って、つくり上げては壊してを繰り返してゆくことが必要だと思いました」。高尾真里恵さん（大阪交響楽団）は「オーケストラで弾いていると自分の持っている音楽が見えなくなってくる。今回参加し、ヒントというか、先が見えてきました」。

ニューイヤーコンサートを終え、聴衆の拍手を受ける受講生ら。右端は今井さん

最年少の東京芸大付属高校2年生、大野若菜さんは「今井先生の姿を間近で見られるのがうれしい。先生の音楽は一音だけでも吸い込まれていくような感じ。それぞれの音が魅力的ですから」と話す。

大野さんは外国組から多くの刺激を受けた。「日本人は完璧に弾かなければと考えがちですが、外国の人はレッスンにしろアンサンブルにしろ、とにかく楽しんでいます」と語る。

箏（そう）と協演した中国のシェン・リュウさんは「音楽に対しても人に対しても常に正直になることが大切」と話していた。